

[Navigation](#) [トップ](#) >> [畜産草地研究所研究報告](#) >> [第5号](#) >> [豚部分肉の特定部位自給率低下](#)

豚部分肉の特定部位自給率低下

賀来康一・島田和宏・荻野暁史・山内盛弘¹⁾・深瀬 誠²⁾

畜産環境部

¹⁾ 社団法人東京穀物市況調査会²⁾ 日本食肉貿易研究所

摘 要

国内での豚肉流通実態を明らかにする目的で、入手資料を分析した。1988年から2000年に、豚肉の部位別国内流通合計量は、143万トンから155万トンへ微増し、自給率は77.7%から58.0%へ低下した。2000年の部位別自給率は「ひれ」26.1%、「ロース」32.2%、「ばら」54.4%、「かた」73.4%、「もも」95.0%であり、とくに特定部位である「ひれ」と「ロース」については、1988年から2000年にかけて、「ひれ」は63.1%から32.2%へ、「ロース」は56.2%から26.1%へと顕著に低下した。豚部分肉の国内市場規模は、1989年から2000年にかけて72%に縮小した。国内の豚肉流通は枝肉流通を前提として、畜産物価格安定制度と輸入制度が存在するなか、1995年から2000年にかけて部分肉の流通を扱う日本食肉流通センターの扱い量は、国産豚肉流通量の4.7%から15.8%へ増加した。1999年の大手ハム・ソーセージ会社上位10社は食肉流通業者としての売り上げが大きく、7社の売上額が総売上額の50%以上、3社が30%以上50%以下であり、国内での豚肉流通は、大手ハム・ソーセージ会社の影響が大きい。豚肉の国内流通の主流は枝肉から部分肉に移行し、輸入豚肉も部位別に輸入されている。国内の豚肉流通について部分肉流通が増加している現状から、現行の畜産物価格安定制度と輸入制度の実効性向上にむけ、新たな施策を検討することは有意義である。

キーワード: 豚肉, 自給率, 部分肉, ひれ, ロース